

Connect





築地本願寺の取材中、泣きながら電話をする女性を目にした。

寺院の境内で泣く外国人という思いがけない出来事に感情が揺れ、
手に持ったリコーのコンパクトカメラのシャッターを急いで切った。

撮影から数週間後、ずっと気になっていた映画を何気なく鑑賞していると、
印象的なシーンがこの写真とリンクする。

撮影時に感じた違和感、涙の理由、そんなことはどうでもよくなった。

STAND BY ME

役所広司主演で話題になった映画『PERFECT DAYS』の劇中では、東京スカイツリーが印象的に映る。スカイツリーのふもとに暮らす主人公の男は、毎日同じルーティーンを繰り返し、毎日のようにスカイツリーを眺める。東京に暮らす人にとって、あの巨大な建築物は単なる風景のひとつに過ぎないだろう。

「今度は今度、今は今」

「何にも変わらないなんてそんなバカな話あるわけじゃないですか」というセリフを話す男には、同じ生活を送るからこそ、その変化を感じ取るかのように早朝の運転中や自転車に乗る夜も、毎日その存在を気にかける。

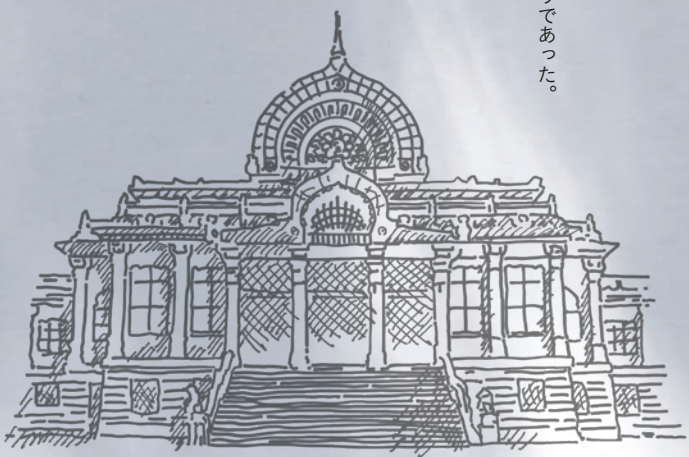
スカイツリーもまた男を優しく見下ろす。

それぞれの感情や人生によって見上げ方は全く異なるのだろう。

我々が訪れた築地本願寺も、男が見上げるスカイツリーの存在ののように感じた。

偶然目にした境内で泣く女性の背後に佇む寺院が、

まるで映画の男を見下ろすスカイツリーのように、無言でそっと寄り添い、まるごと受け入れているかのようにであった。



ドイツの名匠ウィム・ヴェンダースと日本を代表する俳優役所広司の美しきセッション。

東京・渋谷でトイレ清掃員として働く平山（役所広司）は、静かに淡々とした日々を生きていた。同じ時間に目覚め、同じように支度をし、同じように働いた。その毎日は同じことの繰り返しに見えるかもしれないが、同じ日は一日としてなく、男は毎日を新しい日として生きていた。その生き方は美しくすらあった。男は木々を愛していた。木々がつくる木漏れ日に目を細めた。そんな男の日々に思いがけない出来事がおきる。それが男の過去を小さく揺らした。

「パリ、テキサス」「ベルリン・天使の詩」などで知られるドイツの名匠ウィム・ヴェンダースが、役所広司を主演に迎え、東京・渋谷を舞台にトイレの清掃員の男が送る日々の小さな揺らぎを描いたドラマ。2023年・第76回カンヌ国際映画祭コンペティション部門で、役所が日本人俳優としては19年ぶり2人目となる男優賞を受賞する他、キリスト教関連の団体から、人間の内面を豊かに描いた作品に贈られるエキシメニカル審査員賞も受賞。また、第96回アカデミー賞の国際長編映画賞にノミネートされた。



東京都内でも有数の観光地である築地。
銀座からも徒歩圏内というアクセスしやすい立地で、現在も営業中の「築地場外市場」や、新名所の「築地魚河岸」など多くの国内外の観光客で賑わっている。

そんな築地駅に降り立って目の前に現れるのが「築地本願寺」だ。一般的なお寺のイメージとはかけ離れた外観で、仏教寺院に見えない人もいるだろうが、れっきとした浄土真宗本願寺派の寺院である。

文化庁の「宗教年鑑」（令和5年）によると、日本には仏教系だけでも7万6700ヶ寺もの寺がある。
コンビニよりも多い数字なのだ。

しかし、近年の宗教離れで多くのお寺の経営は厳しくなり、築地本願寺も10年ほど前は赤字の運営に陥っていた。
だが、多くの改革を行い参拝者を倍増させ、V字回復を遂げた築地本願寺を体現しに取材に行ってきた。



築地本願寺の本堂は、東京帝国大学（現在の東京大学）名誉教授で、建築史家の伊東忠太博士の設計によるものだが、建築研究のためアジア各国を旅した博士と時を同じく、仏教伝来ルートを明らかにするために探検隊を結成し、シルクロードを旅した大谷光瑞（浄土真宗本願寺派第22世法主）氏との出会いが縁となっている。

築地本願寺の建物は、インド等アジアの古代仏教建築を模した外観や、本堂入り口のステンドグラス、数多くの動物の彫刻などが特徴的だ。

オリエンタルな雰囲気は、シルクロードを伝える仏教伝来のルーツを感じさせる一方で、内観にお

いては伝統的な真宗寺院の造りとなっている。
シルクロードを旅してきた伊東忠太博士でなければ作り上げることのできない、独特な仏教寺院となっている。

取材をする中で印象的だったのは、「土足」で参拝できること。

一般のお寺との大きな違いのひとつだろう。

これは今の時代に合わせたわけではなく、90年前の伊藤忠太氏による再建当時のスタイルだ。

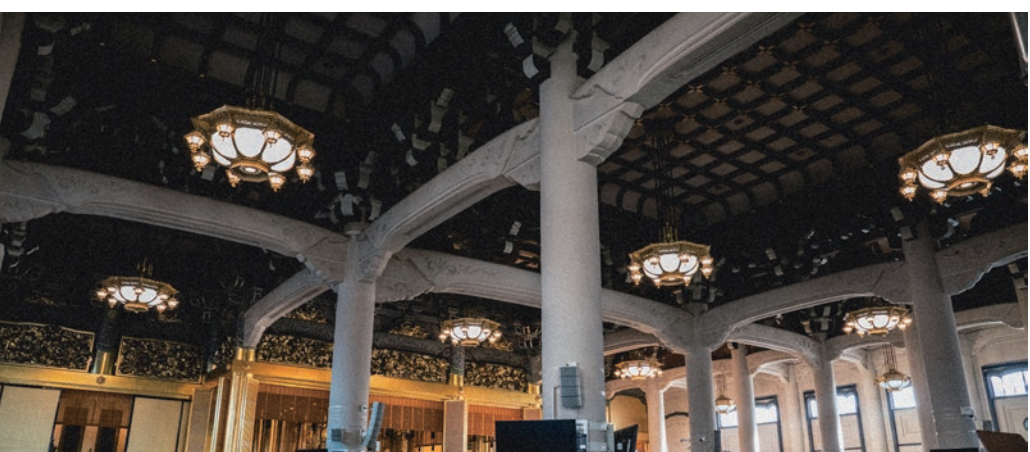
当時の浄土真宗本願寺派門主であった大谷光瑞氏のアイデアだという。

築地本願寺は、1617年に浅草近くに創建され、1657年の「明暦の大火」とよばれる大火事で焼失。

その後、再建のため江戸幕府から与えられた土地が現在の場所だが、当時は海上だったため、海を埋め立てて土地を築き本堂を建立したことが「築地」という名称の由来になっているそう。

その後、関東大震災に伴う火災により再度本堂を焼失し、1934年に再建し現在の本堂の姿となっている。

現在の姿になって90年、目まぐるしく変化していく築地の歴史の目撃者となったことだろう。







いつでも、
誰でも、
受け入れてくれる場所。

訪れる人は参拝者や観光客はもちろん、本堂内や境内のベンチで休憩や読書をする人。
ふらっと立ち寄っているビジネスマン風の人。

若いカップル。

様々な肌の色の人。

様々な言語の人。

それぞれがそれぞれの時間を過ごしていた。

「サードプレイス」

家でも職場でも学校でもない。

「第三の居場所」としていつでも誰でも受け入れてくれる場所なんだ。



心豊かになるサービス

2017年、境内に複合施設「インフォメーションセンター」が作られた。

中でも「築地本願寺カフェ『Tsunagi』」は多くの客で賑わっている。看板メニューは朝食で、インスタ映えを狙った客で行列ができるそう。

センター内では定期的に僧侶の短い法話も聞くことができるし、相談窓口まで設置されている。

誰でも訪れやすいこの空間は、相談事に訪れる人も多いそうで、驚きなのは年配の方の終活相談や仏事相談だけではなく、若い人からの心の悩みの相談なんかも少なくないそうだ。

これらの活動は築地本願寺の成功例として感心されるが、根本的にはお寺が持つ機能でもあると教わった。

お寺とはなにか？

法事やお盆にお参りに行くだけの場所？

葬式や除夜の鐘だけ？

いや、お寺はもともとっとポテンシャルを秘めている。仏事相談はもちろん、嬉しいことも悲しいことも吐き出せる場所、いつでもどんな時も頼りになる存在として、うまく利用すればいいのだ。

諸行無常。時代は刻々と変化するが、人の心はどうだろうか。2500年前にブッダが「人生は苦である」と説いた時も現在も、人の心の根は何も変わっていないのではないだろうか。

時代と共に悩みの種は変化するかもしれないが、お寺も時代に合わせて悩み苦しむ人の心にそっと寄り添う存在になりたい。



身近なお寺に対してちょっと敷居が高く感じているそのあなた。是非、いつでもどんな時もお寺に気軽に足を踏み入れてみてほしい。いつでも誰でも受け入れ、心の拠り所となってくれるだろう。



東京の地下鉄日比谷線築地駅を出て、真っ先に目を引くエキゾチックな何とも不思議な魅力のある建物。それが私が6年間奉職させていただいた築地本願寺。

本堂は建築家である伊藤忠太氏の設計によるもので、インド様式が取り入れられている。

勤務中、観光などで何も知らずに訪れた方から「この建物は何ですか?」と聞かれ、「浄土真宗のお寺ですよ」と答えると、驚いた表情をする方も珍しくない。現在でさえお寺とは思えない外観なので、現在の姿に再建された1930年代当時の世間の反応は、想像を絶する。

築地本願寺の建築は、外観だけではなく、内部も当時の日本の寺院には考えられない構造になっている。外陣と呼ばれる参拝者用の空間は、椅子席・土足での参拝が可能で、スチーム式の暖房設備が柱に組み込まれている。これは当時の門主で

あった大谷光瑞氏が「これからは教会のように誰もが入れて、椅子に座れるお寺が必要だ」という思いのもと、伊藤忠太氏と共に設計した。きっと安全安心で、誰もが参りしやすい最先端のお寺を目指したのだろう。

そんな築地本願寺だが、時代の流れと共に「敷居が高い・閉鎖的」な存在となってしまう。

しかし、再建された当時の思いを受け継ぎ、「開かれたお寺」をスローガンに大規模な組織・境内改革が行われることとなる。2017年、築地本願寺は多くの方に親しまれるお寺に生まれ変わった。この改革については多くのメディアにも取り上げられたので、ご存じの方も多いかもしれない。

この改革の真っ只中、私は奉職させていただき、改革の目撃者となった。新入職員で何もわからない私だったが、変革のスピードを肌で感じていた。職員として様々な変化に対応することは大変なこ

ともあったが、貴重な経験となった。

「開かれたお寺」というのは、私たちのお寺も同じ様に求められている。

僧侶として、いつの時代も変わらない浄土真宗の「み教え」を伝えていくと共に、時代に合わせた「開かれたお寺」を、ご門徒のみなさまと共に築いていきたい。

芦別市(空知北組)

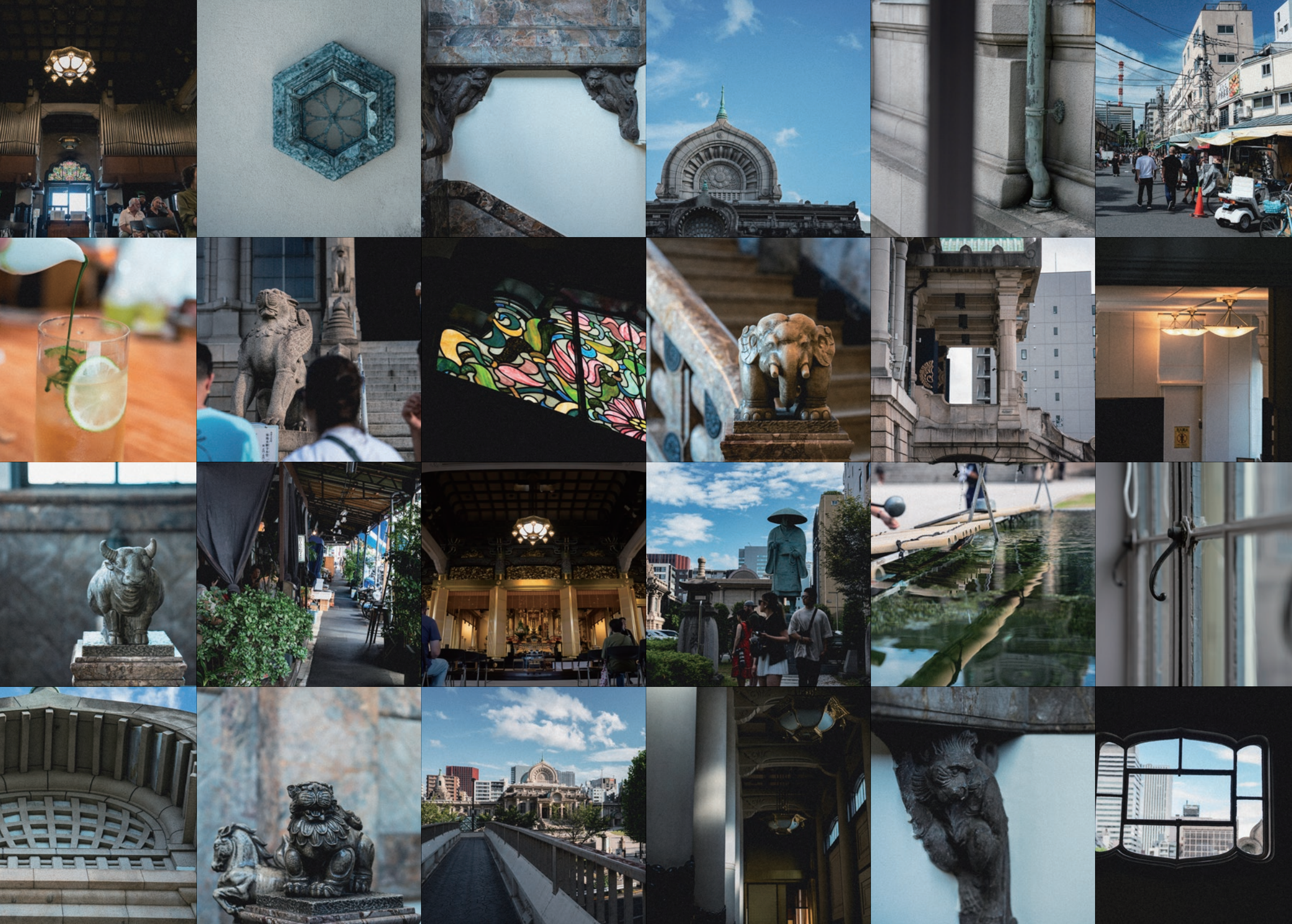
西林寺 住職 小林紗弥子

kūnan
Column



もうひとつの
物語

ちょっと寄ってこ。



Connect

【くうなん広報紙コネクト】

Vol.007 2024年12月発行

発行／空知南組
編集／空知南組広報部

く う な ん

像 采

くうなん公式ホームページはこちら



く う な ん



私たちは北海道南空知地区を拠点として活動する浄土真宗本願寺派寺院の団体「空知南組」、通称「くうなん」です。

Editors KOUE TSUBOI
TAKUYA KANNO
TATSUTO NAGAOKA

Designer HIROYUKI YAMAZAKI
Photographer TATSUTO NAGAOKA
HIROYUKI YAMAZAKI